

イチゴの夜冷短日処理による第2花房の花成誘導

森下昌三・*井手和浩・望月龍也・野口裕司 (野菜・茶業試験場久留米支場・*佐賀松浦農協)

Masami MORISHITA, Kazuhiro IDE, Tatsuya Mochizuki and Yuji Noguchi: Induction of Axillary Flower Bud by Low-night-temperature with Short-day Treatment in Strawberry

近年イチゴ促成栽培においては、夜冷装置の導入により早期出荷が可能になり、年内収量も増加してきたが、さらに早期収量を高めるため、夜冷装置を利用して第1花房(頂花房)のみでなく第2花房(第1次腋花房)も連続して誘導する可能性を検討した。

1. 材料及び方法

‘とよのか’、‘女峰’及び‘宝交早生’ランナーを5月下旬に鉢上げし、自然条件下で育苗後(12cmポット)、8月10日から20日、25日、30日、35日及び40日間の夜冷短日処理を行い、処理後直ちに露地に定植した。1区10株を用い、処理条件は夜温12℃・8時間日長とし、昼間は昇温防止のため黒寒冷紗下(相対照度61%)に置いた。第1花房及び第2花房の出蕾日、並びに第1花房前出葉数(処理開始時から第1花房までの出葉数)及び第1-第2花房間葉数を調査した。

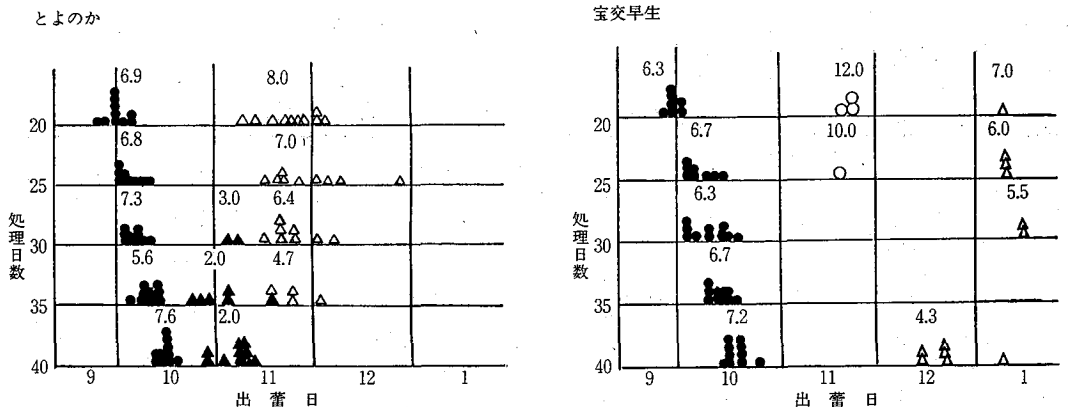
2. 結果及び考察

夜冷短日処理で花成誘導され出蕾したものを誘導株、自然条件下で出蕾したものを非誘導株とし、両者は第1花房前出葉数及び第1-第2花房間葉数で区別した。全品種とも第1花房前出葉数が6~7枚の株を第1花房誘導株とし、10~12枚の株を非誘導株とした。次いで第1-第2花房間葉数は‘とよのか’の20、25日間処理で7~8枚、30、35日間処理では5~8枚の株と2~3枚の株が混在し、40日間処理では2枚であった。‘女峰’では、

20、25、30日間処理で4~6枚、35、40日間処理では4~5枚の株と2~3枚の株が混在した。‘宝交早生’は全区で4~6枚であった。なお第1-第2花房間葉数3枚の株と4枚の株の間には出蕾日に大きな開きが認められた。このことから第1-第2花房間葉数が2~3枚の株を第2花房誘導株、4~8枚の株を非誘導株とした。

‘とよのか’、‘女峰’の第1花房は、すべての処理区で100%誘導され、第2花房は40日間処理区で、‘とよのか’が100%、‘女峰’が70%誘導された。‘宝交早生’の第1花房は、20、25日間処理区で70~90%、その他の処理区で100%誘導された。全品種とも第1花房の出蕾日は処理数が多いほど遅れたが、これは定植時期が遅れたためと考えられる。また‘とよのか’、‘女峰’の第2花房では、誘導株は非誘導株に比べて21~29日早く出蕾した。なお40日間処理の‘宝交早生’の第2花房が他の処理区より早く出蕾したが、第1-第2花房間葉数が4~5枚であることから、夜冷短日処理によるものでなく、自然条件により誘導されたものと推察される。

以上の結果から‘とよのか’では35~40日間、‘女峰’では40日間よりもやや長い夜冷短日処理により、第1花房と第2花房を連続して誘導することが可能と思われる。一方‘宝交早生’は40日の夜冷短日処理でも第2花房の花成誘導には不十分であると考えられる。



第1図 夜冷処理日数別の第1花房及び第2花房出蕾日

注) 図中の数字は第1花房前出葉数ないし第1-第2花房間葉数

- : 第1花房誘導株
- : 第1花房非誘導株
- ▲ : 第2花房誘導株
- △ : 第2花房非誘導株